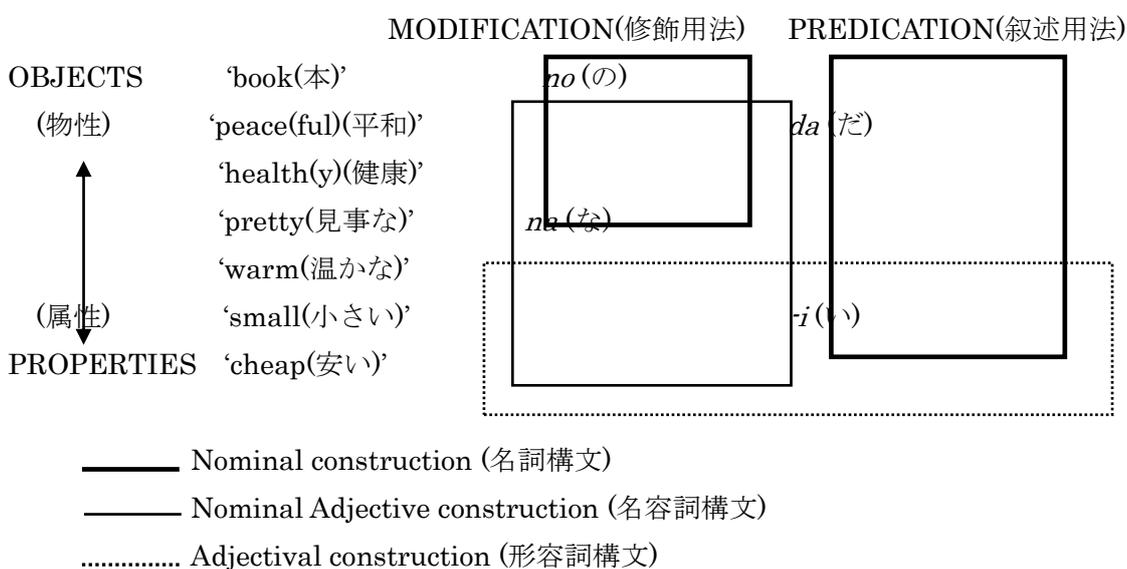


そうですね。ぼくが挙げた日本語の「形容詞」の事例は、漢字とひらがなの組合せになっていますが、日本語の「形容詞」は、語末が「しい/shi・i/」で終わるものと、「い/i/」で終わるもの、また「な/na/」で終わるものがあることが判ります。これに反して英語は、語末が子音+yのパターンとか-ous または-fulのパターンにおいて、'adjective'である傾向を見ることができそうです。ただ日本語の場合のように、語末が必ず「(し)い・な」になるような形態的な強い統一性はなさそうです。ウィリアム・クロフト(William Croft)という言語学者は、日本語の「形容詞」が名詞を修飾したり、文の述部になったりすることを組み合わせて、次のような意味地図を作製しています。

表 1. The semantic map for the Japanese Nominal, Nominal Adjective, and Adjectival construction (日本語の名詞構文・名容詞構文・形容詞構文の意味地図)



Croft (2001: 95) 日本語表示は筆者による

「見事な」という語を 'pretty' で捉えているのちよっと判らない点もあるのですが、見れば見るほど、なかなか鋭い洞察で作成されている表と思いませんか？ 残念ながら、この日本語の「名詞・形容詞」における意味の連続性を説明した図(「意味地図」)を作成しているのは、日本語を母語としないクロフトという外国の言語学者です。鋭いセンスと洞察力を持った類型論の学者だと思えます。またロバート・ディクソン(Robert M. W. Dixon)という学者は、形容詞を意味タイプによって次の様に分類しています。

表 1. 意味タイプに従った 'adjective(形容詞)' の分類

1. DIMENSION (次元) 'big', 'small', 'tall', 'short', 'wide', 'deep', etc.
2. AGE (年数) 'new', 'young', 'old', etc. '
3. VALUE (価値) 'good', 'bad', 'lovely', 'atrocious', 'perfect', 'proper (/real)', etc.
 (And also words such as 'odd', 'strange', 'curious', 'crucial', 'important', 'lucky')
4. COLOUR (色) 'black', 'white', 'red', etc.
5. PHYSICAL PROPERTY (物理的特性) 'hard', 'soft', 'heavy', 'wet', 'rough', 'strong', 'clean', 'hot',

‘sour’, etc.

6. HUMAN PROPENSITY (人間的特性) ‘jealous’, ‘happy’, ‘kind’, ‘clever’, ‘generous’, ‘cruel’, ‘proud’, ‘ashamed’, ‘eager’, etc.
7. SPEED (速度) ‘fast’, ‘quick’, ‘slow’, etc.
8. DIFFICULTY (困難度) ‘easy’, ‘difficult’, ‘tough’, ‘hard’, ‘simple’, etc.
9. SIMILARITY (類似度) ‘like’, ‘unlike’, ‘similar’, ‘different (/strange)’, ‘other’, etc.
10. QUALIFICATION (質的程度) ‘definite’, ‘true’, ‘probable’, ‘possible’, ‘likely’, ‘usual’, ‘normal’, ‘common’, ‘correct’, ‘appropriate’, ‘sensible’, etc.
11. QUANTIFICATION (数・量度) ‘all (/whole)’, ‘many’, ‘some’, ‘few’, ‘only’, ‘enough’, etc.
12. POSITION (位置付け) ‘high’, ‘low’, ‘near’, ‘far/distant’, ‘right’, ‘left (/ strange)’, ‘northern’, etc.
13. CARDINAL NUMBERS. (基数) (In some languages these constitute a separate word class.) And ‘first’, ‘last’ (together with other ordinal numbers).

Dixon (2004:3-5)

ディクソンは ‘adjective’ に、意味タイプを見出すことによって分類しています。クロフトにしてもディクソンにしても、明快な論理を基に分析を行っているのは流石(さすが)だと思います。ただ中野は、この非常に良くできたクロフトによる日本語「形容詞」の意味地図には、決定的な誤謬(ごびゅう)があると考えているのです。また、ディクソンの意味タイプによる ‘adjective’ の分類も、日本語には妥当しないと考えているのです。どうでしょう、みなさんは何か感じられる点がありますか？ 実は中野は、日本語の「形容詞」と呼ばれている文法カテゴリは、英語の ‘adjective’ と呼ばれている文法カテゴリに対して、互換性を有していないと考えているのです。簡単に言えば、日本語の「形容詞」と呼ばれているものは、英語の ‘adjective’ として翻訳できないと考えているのです。逆も一緒です。英語の ‘adjective’ を日本語の「形容詞」として翻訳できません。認知言語学を含んだ他の言語学の研究者達には、「何を言っているんだ君は、現に君は英語の ‘adjective’ の横に、日本語の形容詞訳を付けているではないか」と言われてしまうでしょう。それでも、英語の ‘adjective’ と日本語の「形容詞」と呼ばれる文法カテゴリの間には、互換が成立しないと考えているのです。簡単に述べると、日本語の「形容詞」は英語の ‘adjective(形容詞)’ではない、と考えているのです。

この問題を、少し視点を変えて分析してみたいと思います。先ほどみなさんに挙げてもらった 10 の日本語の「形容詞」の事例と、中野が挙げた 50 の「形容詞」の事例をもう一度見てみましょう。日本語の「形容詞」は、語末が「しい/shi・i/」で終わるものと、「い/i/」で終わるものと、「な/na/」で終わるものがありました。もう一度、見抜きを試みてください。

<見抜き②>

(All Rights Reserved)